先進的なまちづくりをしている人のコミュニティ意識

中庭ゼミ　22111284　長谷川雄大

はじめに

都市の中では個人が孤立してしまうことが多い。これらの孤立感をなくし、居場所がある活気あるまちにしたい。そのため、成功しているまちのコミュニティ意識を調べることによって、今後、コミュニティの居場所づくりをする方法論を考える。

先進的なまちづくりをしている人はどのようなコミュニティデザインをしているのか、また、どのような意識をもってそれを行っているのかを明らかにする。

日本のコミュニティの問題

都市のコミュニティは希薄であることが多い。しかし、プライバシーは守られている。一方、田舎では個々のつながりが強いく、助け合っている。しかし、プライバシーが守られていない。日本の田舎と都市はこの両極端な構造になっており、二つの良いところを持ったまちはとても少ない。ではなぜこのような状態になってしまったのか。

田舎の場合、一つ目は他人に対して互助の規制が強いことが考えられる。そのため、田舎では相手に対して過干渉になる。一方、都市では過干渉が嫌で、関わろうとせず、孤立気味になることもある。二つ目は個々の能力がないため、誰かに頼ろうとすることである。

日本のコミュニティの改善

先のコミュニティでは両極端なものになってしまう。そのため、弱いつながり(weak ties)を持ったコミュニティを形成する必要性がある。そこで居場所の良いサードプレイスの構築が求められる。サードプレイスは居心地の良い三番目の場所という意味。つまり会社、学校や家以外の居場所。サードプレイスはコモンズとも考えられる。コモンズの管理組織がコミュニティとここでは定義するが、その場合、そこでコミュニティが形成される。

北京の例

ここでコミュニティが空間化された例として北京の例を挙げる。北京では四合院(ピンイン)というものがある。東西南北を塀や家屋で囲まれた住宅のことである。　もともと一戸の四合院に一世帯が住むのがふつうであったが、１９５０年代からの急激な人口増加により、四合院は数世帯で住むようになった。これを雑院という。規模が大きくなると大雑院という。

雑院はスペースが狭いが中庭、小道(胡同(フートン))その結果、人々が集まるオープンスペースができた。その後、小道を意味する胡同はコミュニティの１単位となった。

この雑院は皆がしっかりと見守りあっている。関心はある。しかしながら、干渉はしないというこの距離感がまちのセキュリティにつながっている。(ネイバーフットウォッチ)さらに、気が向いたら、中庭や胡同で会話を楽しめるサードプレイスとなる。

今後の調査対象

赴いた各地で、まちづくりを行っている人、コミュニティの形成に成功している人、コミュニティ形成に成功しているまちの住人をインタビューする。調査対象地は、クリエイティブなことを行っているわけではないがサードプレイスになっている横須賀の個人経営のカフェ、東京に立地しているコワーキングスペースの経営者、そこの賃借人。

引用参考文献

・一般社団法人大都市政策研究機構 大都市政策研究班（2021）「「大都市政策の系譜」シリーズ 第２回」『ハワードの田園都市』
・石山恒貴(2021)「サードプレイス概念の拡張の検討 -サービス供給主体としてのサードプレイスの可能性と課題」
・篠原聡子(2021)平凡社『アジアンコモンズ-今考える集住のつながりとデザイン-』
・エリノア・オストロム 著、原田　禎夫 訳、齋藤　暖生 訳、嶋田　大作 訳（2022）晃洋書房『コモンズのガバナンス-人々の協同と制度の進化-』
・山本眞人（2022）BMFT 出版部『コモンズ思考をマッピングする-ポスト資本主義的ガバナンスへ』